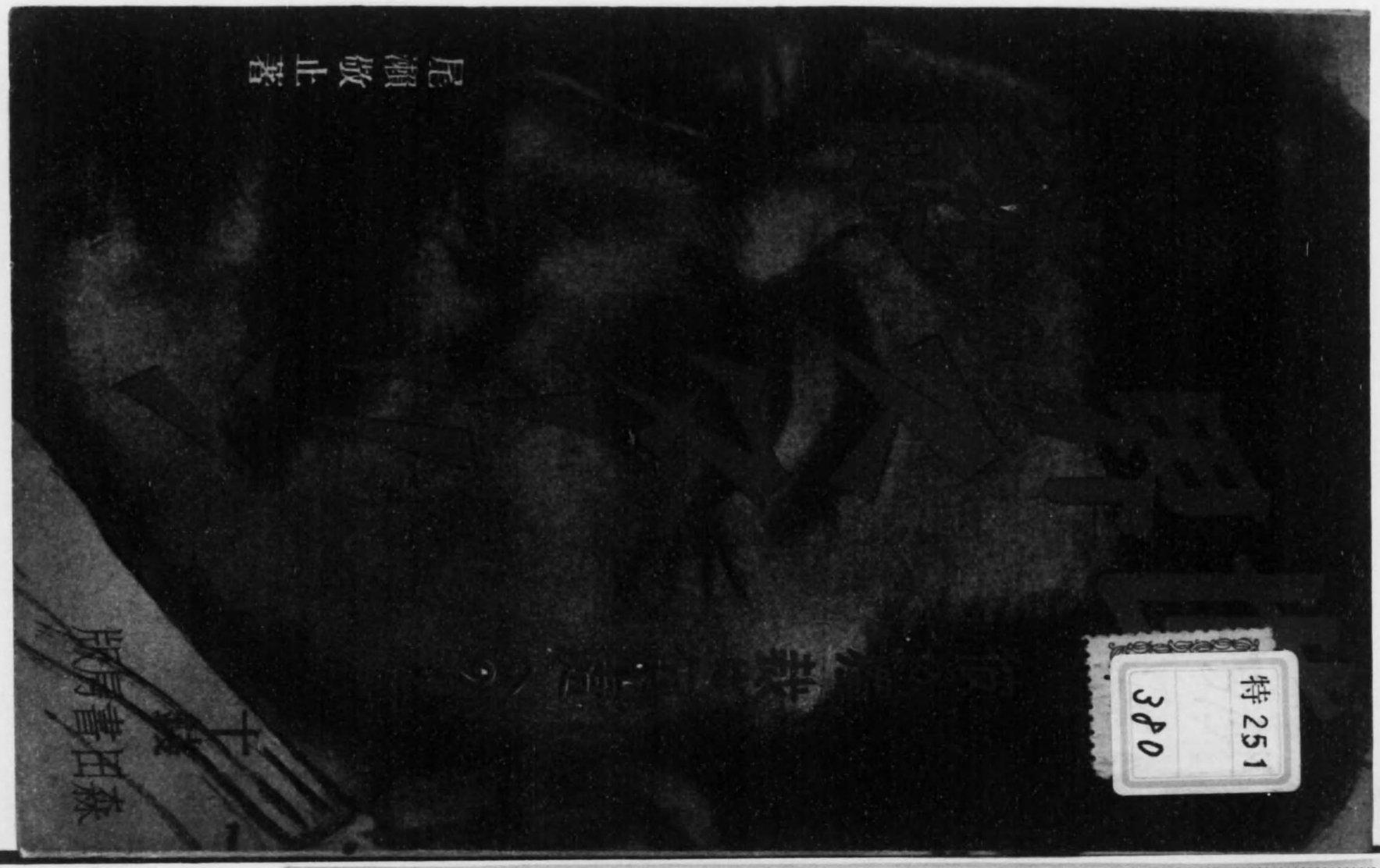

特251
3P0

世界の大不況

彼の獨裁は何處へ？

尾瀬敬止著

十錢
森田書房版

特251
380

特251
380

尾瀬敬止著

世界の謎スターリン

森田書房版

昭和十八年納本
帝國

序

今、世界のスポット・ライトは、最大限の光熱を放つて、北歐の一角と東亞の一角を照しつけてゐる。それは――兎に角にも、いつかは地上に共產主義社會を建設せんとするソヴエート聯邦であり、黃塵濛々たる北支の戰野である。しかし、私に與へられたテーマは、斷はるまでもなく、前者で無くてはならない。

このソヴエート聯邦は、常に、われ〳〵の眼前に、あらゆるトピツク・ニユースを投げつゝあるが、最近の如きは特に甚だしい。かの數回に亘るトロツキー一派の陰謀事件は言ふまでもなく、赤軍八將星の銃殺事件があつたかと思ふと、今度は乾岔子島事件を起してゐる。中でも、乾岔子島事件は、日滿兩國に直接の關係があるので、その事件の前途は大いに注目されたが、首尾よく解決を見たのは何よりだ。

爰には、これらの諸問題をとり上げて批評しようとは思はない。それよりは、この種の次ぎ

から次ぎへと起りくる難問題解決の鍵をひとり握つて、世界の動きを靜かに凝視するスターリンに就いて語りたい。

一九三七年七月

筆者

目次

革命當時のロシヤ……（一）
赤い廣場……（四）
ソ聯とスターリンの人氣……（五）
若き日のスターリン……（一一）
軍事家としてのスターリン……（一四）
スターリンの政治的生活……（二〇）
八將星銃殺の悲劇……（二四）
スターリンの生活態度……（二五）
彼の戰爭に對する見解……（三五）

彼に課せられた宿題……（三七）

世界の謎スターリン

尾瀬敬止

革命當時のロシヤ

北歐の都――レニングラード。そのレニングラードに、革命ののろしが揚げられたのは、一九一七年の十一月であつた。赤い旗は町々にひるがへり、ネワ河畔にあつた『オーロラ號』はさかんに冬宮を砲撃し、そこで開會中の憲法議會にのぞんだ閣僚たちはどん〳〵捕縛される。それと知つたケレンスキー首相は、かねて用意してゐた飛行機にひらりと乘り込み、卑怯にもいづれかへ雲隱れしてしまつた。そしてロシアの全土には、しきりに暗雲が低迷し、國民をして不安のどん底に突き落したのである。

この歴史的な大政變が捲き起された時の事だつた。誰が噂するともなしに、それからそれへと次ぎのやうな奇怪な言葉が傳はつた。國内は勿論のこと、外國人の間でも同じである。

「實驗室の中のロシヤ！」

と言へば大低の人達には判るだらうが、考へ方によると、それは非常に恐ろしい意味をもつ言葉であつた。何しろ、小さな實驗室の中に、世界の六分の一を占めるやうな大國を放り込んで、これを自分勝手に改造しようといふ譯だから。だが、實際に、そんな『手品』が出來るものでないことは、讀者の方でもよく想像されよう。しかし、兎に角にも、飽くまで唯物史觀の立場から、いはゆる『神秘なロシア』を實驗的材料にして解剖しようとしたことは確かなのだ。

果して、この實驗室内の試驗管は、リトマス液か、何んかを注いだ場合、どんな色を呈したであらうか？赤か、桃色か、白か？斷はるまでもなく『赤』であつた。その色はソヴエート革命を意味する。ところで、眞に、革命は成功したであらうか？

この研究はなか〳〵面白いのだが、それは筆者の目的ではないので、先づ『實驗室の中のロシヤ』を覗いて見るとしよう。と言ふと、思ひ出されるのは、革命當初における都會と農村の風景でなくてはならない。何んと言つても、レニングラードはその烽火が揚げられた土地だけに騒擾が激しかつたらしい。五日も、十日も、二十日も、毎日猛烈な市街戰があつたのでは、息もつげよう筈がない。モスクワには、『政府』がなかつたので、この舊都は比較的に穩やかであつたやうだ。だが、目貫きの大通り――ツウヨルスカヤを通る時には、道の片方の塀か何かにくつついて歩かなければ危かつたとか。それこそ平蜘蛛のやうなポーズをしてでないと、直ぐ、流れ玉にやられる心配が充分だつたからである。

かういふ鐵砲玉に魂消た連中は、否應なしに、遠い田舍の方へ落ちて行かねばならなかつた。とは言ふものの、決して その旅も樂しいものではない。汽車の車室といふ車室はみんな鈴なりの滿員だ。二重窓を透してみると。青ざめた乘客がギツシリ詰つてゐて、中には天井に近い木棚の上で窮屈さうに寢そべつてゐる者もある。これは、客車兼貨車の『四等車』といふ奴だが、三等車でも、二等車でも、また一等車でも、ほとんど變りがない。當時はさう言つた等級の差などは考へてもゐられなかつた。ところで、驚いたことには、車輛の屋根の上にも『乘客』がうんと乘つかつてゐたのではないか。ロヘ客であるのは勿論だが――それが、いたいけな子

供とか、ヨボ〳〵した婆さんであると、筆者などは、ヘラ〳〵して見てはゐられなかつた。若し、そんな心配や危險が無いとしても、一體、かういふ漂泊の人々はどこを指して行つたのであらうか。

赤い廣場

やがて、ソヴエート政府は、レニングラードからモスクワに移された。モスクワの市内にはクレムリン宮殿があり、この宮殿の古い煉瓦壁の下には、『赤い廣場』がずつと長く横たはつてゐる。廣場の中央には、例のレーニン廟があつて、その屋上の演壇からは、幾度、世界革命が叫ばれたことか！

この高い叫び聲は、たしかに、現代世界への或る脅威であつたらう。なぜなら、たとへ一時的にもせよ、地球の上には『幻怪の影』が黒く漂つたからである。しかし、その後各國に起つたフアツショの嵐は、この暗影をかなりに吹き拂つた形となつた。そして、スターリンをしていはゆる『一國社會主義建設』——といふスローガンを考へさせたのである。無論、かれは、それをもつて滿足してゐるのでは決してない。いつかは他國の同士たちと相謀つて、所期の遠大な目的を貫徹しようと思つてゐるのである。

ところで、こゝに、一つの興味深いニユースがある。それは、イギリスの某經濟團體の代表者ジョン・ラツセルが發表したもので、そのソヴエート旅行から得た『事實』であるといふ。かれが最初に(一九三〇年)出かけた時はさうでもなかつたが、再び訪ねた時には、もう誰も世界革命などと口走りはしない。若い共產黨員の中で、インターナショナルの始めの方は覺えてゐるが、おしまひまでズツト歌ひつゞけられぬ者もあつたと。但し、これは、パリーで發行する一白系露字紙の特種であるから、無論、眞僞のほどは疑はしい。だが、現狀の一端を覗いたものと言へない事もあるまい。とは言へ、或る論者の說くやうに、今日のソヴエート聯邦の凡てが「右へ廻れ」をしたとは、ちよつと考へられないのである。

ソ聯とスターリンの人氣

それは何れにしても、今日のソヴエート聯邦は、全くスターリンの掌中にあると言つていゝ、

コミンテルンを、ロシヤ共産黨を、また、その他のあらゆる重要な政治的機關を抑へてゐるのが――彼だからだ。端的にいへば、スターリンは、この聯邦における絶對的な存在、つまり獨裁者なのである。

ところで、少くとも、社會主義を指標とするソヴエート聯邦においては、今言つた『獨裁者』と稱する國家最高のタイトルがいさゝか奇異に感ぜられないでもない。何んとなれば、それは言葉こそ違つてゐるが、『專制君主』を思はせる。しかも、そのイデオロギーにおいて、對蹠的な位置にあるドイツにも、またイタリーにも、『獨裁者』ヒツトラーや、ムツソリーニが儼として存在するからである。しかし、スターリンは、そこに少しの矛盾撞着をも認めないがごとく獨裁について左のやうに語つてゐる。

「無産者の獨裁は自ら流れるまゝに委しておくことは出來ない。何よりも先づ黨の力とその指導が必要である。」

その言葉によると、獨裁者は彼自身でなくして無産者全體である。しかし、この獨裁は「自ら流れるまゝに」放任しておけないから、黨の指導を受けることが先決問題だと言ふのである。

だが、スターリンは「黨の指導は集團内で爲されてはいけない」といふ言葉を否定してゐる。であればこそ、それを空想し、また語ることは愚かであると言つてから、かう言葉を續けてゐる。集團的勞働、集團的指導、黨の統制、少數者は多數者に服從すと云ふ、條件の下における中央委員會所管の各機關の統制――これが今日われ〳〵に必要なものだ。尤も、それには、國民大衆の支持が無ければ、獨裁は不可能であると斷じてゐる。

しかし、スターリンは、彼れの言葉の中に示されたやうに、「黨の統制」には努めてゐるとしても、果して「集團的な」指導をしてゐるであらうか。と言ふのは、卑近な例を擧げると、その黨の名の下に發せられた指令でも、彼の意志によつて左右されてゐるやうに思へないでもない。また、自分の手許には、黨の重要人物の調査資料を備へておいて、若し怪しいと睨んだ時には、その人間を捕縛することも、流刑に處することも勝手だと傳へられてゐるからだ。早い話には、嘗てルイコフが人民委員會議(内閣)長であつた時にも、こんな穏やかならぬ噂が立つたことがある。何んでも、彼の行動が氣に入らぬとあつて、直ちにその後釜にスクルツオフを据えつけたものだ。ところで、反抗でもすると、その「人民委員會議からも放逐するぞ」と脅

したとか。だから、大いに縮み上つたらしいが、今日、そのルイコフが『ソ聯の敵』として牢獄に呻吟しつゝあると聞くことは、餘りにも皮肉な哀話である。

とにかく、今日のスターリンは、その個人的勢力から見ると、かのレーニンよりは更に大きな勢力を有つてゐると傳へられてゐる。そのことは、よくソヴエート大會の會場に現はれる、モスクワ大劇場におけるプレジヂウム（幹部席）の盛んな光景を見てもわかる。若し、そこの高臺に、スタリーンの大きくて白い顏が現はれると、言ひ合はしたやうに聽衆が皆んな起ち上るだらう。足踏みする者もある。そして破れるやうな拍手なのである。それが、晩ででもあるとしきりにスポット・ライトを照らしつけて、かれの面貌やゼスチユアをくつきりと浮き立たせる。ちようど、芝居の主役が華やかに舞臺に上つた時のやうに。

しかし、かういふ大袈裟な歡迎振りは何も都會に限つた事ではなく、極めて邊鄙な田舍でも行はれてゐる。

一九三四年のこと。ウクライナの『日の出』といふコルホーズ（集團農場）では、小麥の春蒔きがうまく行つたとあつて、そのお祝ひをすることになつた。中でも、コルホーズの仲間から

『モローズ伯父さん』と呼ばれてゐるダヴイツド・モローゾフは、その年とつた細君と一緒に十キロの畠を耕したといふので、このお祭りにウンと擔ぎ上げられた。そして、新收獲の小麥からブリーナといふ御馳走を作つて、スターリンにも食べて貰ふために、かれを招待する事を決議したのである。無論、スターリンは――たとへ、同鄕のよしみはあるにしても――こんな邊鄙な田舍へは訪ねて來なかつたが、その代りに顏を見せたのは、映畫監督のレフコフであつた。かれの一行は、この『日の出』といふコルホーズの業績を社會に紹介するために、わざ〳〵都會からやつて來たのだ。と言つても、目指す人間はモローズ伯父さんなので、その百姓小舍の向ふ側に住むことにした。そこで、かれとは非常に親しくなつて、自由に家庭へも出入りし、幾人かの子供たちを自分のもののやうに可愛がつた。そして、僅か八日の間に、いろんな生活の場面を撮影して、『モローズ伯父さんの家』といふフイルムを製作したのである。

レフコフとその一行の者は、たんにモローズ伯父さんと親しくなつたばかりではなく、かれのコルホーズの全員とも接近した。果ては、かれらと同じやうに野良仕事まで始めるやうになり、そして、コルホーズ祭を開く事になつた。その肝煎役になつたのは政治支部長のコミツサ

ロフである。いよ〳〵當日になると、モローズ伯父さんが、自分たちのコルホーズをコミツサロフ、つまり官憲に渡すと言つた風の儀式をする。と同時に、スターリンへの贈り物として、かれらの手になつた大きなパンをも托さうとするのだ。そして、式を終ると、第二の映畫――『富めるコルホーズ祭』をカメラに收めた。ところで、モローズ伯父さんは、こんなことから世間的に有名になり、いつか、その模範的農夫(ウダルニック)と一緒に、スターリンに面會を求めるまでになつたといふのである。

無論、かういふ歡迎ぶりは、何もスターリンに對するだけではないが、人民委員會議長(首相)のモーロトフや、交通委員長のカガノーキッチなどは、とても足許にも近寄れまい。

さう言へば、スターリングラードといふ新しい都會があることは有名な話だが、最近にも、こんなセンセーショナルなニュースが新聞面に傳へられて居る。例のウオロシロフ將軍を記念する、さる鐵道工場では、第一の試みとしての、素晴らしい流線型機關車を竣工した。そしてその見上げるやうに高いボイラーの前面には "Stalin" といふ横文字を鮮やかに刻みつけた。だから、この最新鋭の機關車が、一時間に一四〇キロの快速力をもつて、ソヴエート聯邦の領土内を駈け廻るのも遠い事ではあるまい。また、ウオルガ―モスクワ間の新しい大運河には、やはり彼の名を冠した、白色で上下二層になつた瀟洒な小蒸氣船が浮んでゐる。それから先頃墜落大破したゴーリキー號と同型の巨人機『ヨシーフ・スターリン』が、目下完成へと急いでゐる。これらの諸事實は、いきほひ、讀者の目の前に、次ぎのやうな感銘を與へずにはゐまい。眞に、獨裁者スターリンの名は、近い將來において、地にも、水にも、また空にも、いよ〳〵強く印せられるであらう、と。

若き日のスターリン

しかし、ソヴエート聯邦においで、斯くのごとくスターリンが絶對的勢力を有つやうになつたのは何故か？これには、いろ〳〵な原因があらうが、その過去における革命的及ひ政治的生活も大いに影響してゐるに違ひない。だから今暫らくかれの生活史上の注目すべき數頁を繰つて見よう。

スターリン(本名はヨシーフ・ヂユガシウイリ)は、日本流にいふと――今年五十九歳であつ

て、チフリス縣の小都ゴリーの農夫の家に生れた。その後、かれの父は靴工になつたが、少年時代のソソは、グルヂヤの曠野に出て野牛を追つたり、葡萄の栽培をしたりした。そして、コーカサスの舊都チフリスに出て、正教神學校に入學することになつた。

ところで、皮肉にも、この學校は、當時の青年たちにあらゆる自由思想を吹き込む學園であつた。生徒たちは、キリストの尊さを敎へられる代りに、却つて神を信ずることの愚さを說いた。何故なら、かれらはマルクシズムに走り、その中の一人であるスターリンは、やがて同學園内におけるマルクス研究會のリーダーになつた。だが、間もなく當局の彈壓を受け、そのために放校處分にあつた彼は、遂に地下工作に從事することになつたのである。

この時から、スターリンは政治的生活に入り、俗にいふ「職業的」革命家として、一九一七年の大政變まで終始したのである。かれは、チフリスに社會民主黨支部を創立する事に盡力し、代表者としてロンドンの同大會に出席した。その時には、ボリシエヴキキー側に參加して、始めてレーニンと親交を結んだ。日露戰爭後における第一革命には、自分たちの政敵メンシエヴキキーと激しく戰つた。しかし。この間には捕縛、投獄、流刑が相踵ぎ、何度か檢束されては

巧みに逃れ、また地下工作に入つたものだ。そして、このことを想起するだけでも、當時に於けるスターリンが充分想像されよう。

一九〇八年は反動の波が全ロシヤを蔽ふた年である。この時、バクーにあるベーロフ監獄には約一千五百の政治犯人が收容されてゐたが、そこへ一人の新しい囚人が護送されて來た。彼は、コーバと呼ばれた青年であつたが、かういふ新來者の顏が見えると、監獄内ではその人間をどの部屋に入れるかが問題になつた。と言ふのは、各政治犯人の間にも、それ〴〵の區別や待遇の差などがあつたからだ。そして、その部屋を適當に定めるために、ある委員會まで開かれるのである。

ところで、かれは、ボリシエヴキキー出身者だつた。で、その側の人間からは歡迎されたが、メンシエヴキキー側からは排擊されて、大いに去就に迷つた。結局、ボリシエヴキキーたちの部屋に入れられる事になつたが、新參者の悲しさに、第一夜は遠慮して廊下に寢ようとした。すると、一人の仲間がかれを見出して、自分の部屋へ連れ込んだ。だが、コーバはひどく痩せこけてゐたので、或る仲間は「骨と皮だなア」と思つた。そして、「本當に骸骨見たいな男だ。誰か

ペンをくれてやれ」と同情するやうな、また蔑むやうな調子で言つた。しかし、そのコーバといふ男の素性に就いては、知る者が一人もなかつた。たゞ、かれはカーモの親友だといふ事だけは判つてゐた。ところで、そのカーモなる人間は、當時のコーカサスで最も活動してゐた革命家だつたので、皆んなその過去の生活に興味を有ち出した。そこで、かれは、靜かに自分に就いて語り出したさうだが、このコーバとそ——今日のスターリンだつたのである。

軍事家としてのスターリン

一九一七年の初夏の事である。當時のソヴエート政府は、モスクワではなく、レニングラードにあつたが、その時クロンシタツトに大暴動が起つた。スターリンが、詩人のベツドヌイと『プラーウダ』新聞社の編輯局にゐると、そこへ暴動地の水兵たちから彼に電話がかゝつて來た。小銃を持つても、持たずともいゝから、直ぐ應援にこいと言ふのだ。スターリンは、ちよつと思案に迷つたやうに、口髭をしごきながら微笑した。そして、かういふ意味ありげな返事をしたのである。

「小銃？——諸君には、それが必要缺くべからざるものだ。僕は文筆家だから、自分の武器として、いつも鉛筆を手から放さない。その意味を解してくれ給へ」

この挿話からでも想像されるやうに、スターリンは『文筆家』であり、『職業的な革命家』ではあつても、決して『武人』ではない。しかし、一九一八—二〇年における國内戰時代には、自ら戰野に出て、ソヴエート切つての軍略家と言つた風な才能を見せたものだ、だがかういふ話は知つてゐる者が少いと言つて、かのウオロシロフ將軍が次ぎのやうに語つてゐる。以下暫らくその面白さうなところを紹介しよう。と言へば、スターリンは中央委員會に宛てた手紙の中に、「自分は一軍隊の馬小舍掃除夫になつた」といふ意味のことを書いてゐる。これは無論、かれの卑下であつて、いつもスターリンを赤軍代表者として、重要な戰線へ派遣したのは、やはり中央委員會であつた。そして、赤軍ボリシエヴキキー軍が戰鬪に敗れ、將來の不安を思はせる地方には、彼の姿があらはれた。反對に、勝利を占めた地方には、どこにも彼の姿を認めることは出來なかつたとか。

スターリンは自己の軍事上の仕事をツアリツイン戰線から始めた。一九一八年の六月のこと

である。先づ、その全軍に亘る食糧官としての彼は、赤兵の一隊と二臺の裝甲列車と共に戰線に赴いた。ところが、同戰線に於いては、味方の軍規が亂れてゐることを見出したばかりでなく、ドイツの後援をもつたコサック軍の甚だ優勢なることをも認めた。そして、敵軍のツアリツイン占領は、それでなくとも食糧の缺乏を告げてゐるモスクワとレニングラードを威嚇するに充分であつた。尙且つ、ペクー、ウラル、シベリヤの各方面でも、いはゆる反革命軍が蹶起してゐた。斯くして、ロシヤの至るところに、ウオロシロフ將軍の言葉に依れば「火の環が燃えつゝあつた」のである。

かゝる情勢を見ては、さすがのレーニンも額に皺をよせて、戰線にあるスターリンに向つてしきりに專用電話をかけた。何故なら、これは——今も言つたことだが——ツアリツインの向背はソヴエート側にとつて、非常に大きな意義を有つてゐた。つまり、この都市の喪失と、ドン地方の暴動とは、自然の寶庫である北コーカサスを敵軍に委す事になるからだ。そこで、スターリンは、まだツアリツインの南方には暴動が起つてゐないことを報告した。同時に「われ〳〵の手はまだ慄へてゐない」と言つて、レーニンを失望させないやうにと努めた。しかし、

その後の報告には、スターリン自身が元氣を失つて、「味方の將士は精神的に反革命軍と決戰するだけの資格がない」と言つたやうな弱音まで吐いた。だが、周圍の情勢は、ます〳〵緊急を告げて來た。だからレーニンはスターリンの士氣を鼓舞して、かれを食糧全權である上に全赤軍の指導者に任じた。

赤軍の指導者としてのスターリンは、直ちに革命軍事委員會を組織し、新しく正規の軍隊を編成する事に着手した。そして極めて短時日の間に數個の旅團と聯隊を編成して、再び攻勢に移つた、それだけではなくおしまひには、敵軍の一根據地ドンの入口にボリシエヴキキー軍の赤旗をおつ立てた。一方、後方戰線を固める目的から、例のゲー・ペー・ウー制度を創設し、少しでもツヴエート側に反感をもつ者を檢束した。そこで、ツアリツインの各牢獄は滿員の盛況を呈したさうだ。また、ある時はアレクセーエフといふ味方の技師が怪しいと睨むと、法廷に引き出さず直ちに銃殺せよと命じたのは、スターリンだつた。しかし、戰線が相變らず振はなかつたので、トロツキーなどは司令部を後退せよとまで忠告した。でも、かれは頑として應ぜず、つひに敵軍をドンの彼方に徹退せしめ、ツアリツインを守護する事が出來たと言ふのである。

一九一八年も暮れようとする時のこと、東方戰線にあるボリシエヴキキー軍の旗色は常に惡かつた。特に、第三軍は、その半周を敵に包圍されるといふやうな苦境に立ち、今にもペルミ市を占領されようとしてゐた。無理もないと言ふのは、前後六ケ月も不斷に戰ひつゞけたのであつた。この間には非常に食糧の缺乏を告げ、或る旅團などは。五日間パンの一片をも與へられなかつた位だ。その結果、二十日間に、遂に三〇〇キロにも退却を餘儀なくされた上に、將卒一萬八千、大砲數十門、機關銃數萬臺を失つた。かくて敵軍はいよ〳〵攻勢に移つて來たのである。

この狀勢に驚いた中央委員會は、何よりも先きに味方の敗戰の理由を正し、同時に第三軍を補强する必要に迫られた。そこで、レーニンは、スターリンとヂエルジンスキー（ゲイ・ペー・ウー）長官を戰線に送つたのであつた。が、スターリンは、敗戰の理由などは後廻しにして專ら軍隊を整備し、また强化に努めた。そして、直ちに精鋭なる三箇聯隊を送るやうと乞ひ、若し、それが不可能ならば、ウヤトカをも敵手に委するだらうと報告した。この時、ボリシエヴキキー軍は、多數の銃器をも與へられたので、敵の攻勢を食ひ止めたばかりではない。翌年の一

月には、にはかに攻勢に轉じて、ウラリスクを奪取し、東方戰線を窮地から救つたのである。

軍事家としてのスターリンを語るには尙二つの國內戰を語らねばならぬ。その一つは、例のコルチヤツク提督の命令をうけて、ユデイニツチ將軍の率いる白軍がペトログラードを威嚇した時のことである。ユデイニツチ將軍は、エストニヤ兵、フインランド兵、及びイギリス水兵の後援を得て、東方から西方へ向つて俄かに攻勢を開始したのであつた。ところで、ボリシエキキー軍にとつては、後方戰線に少からぬ異狀があつたといふのは、ペトログラード市の中に反革命者が擡頭しつゝあつたからだ。この時にも、スターリンは、中央委員會から戰線に派遣された。そして、味方の陣營を强化し、また、敵軍から味方に投ずる者も少くなかつたので、首尾よくペトログラードを守備することが出來た。

他の一つは、デニキン將軍が、所謂『同盟國』の支持をうけて南方戰線に迫つて來た事である。この時には、モスクワ市內に反ソ的分子が蠢動し、工業狀態も不振の狀態にあつた。だからスターリンは、革命軍事委員會の一人として戰線に送られた。ところで、その任命をうける度に、トロツキーは南方戰線の軍事に容喙させてはいけない、といふ提議をしてゐることは注

目に値ひしよう。そして、この戰線には、ブジョンヌイ將軍などが活躍して、敵軍を黑海の方へ追擊した。かくてウクライナと北コーカサスを解放することが出來た、と。

とにかく、スターリンは、あらゆる國內戰に參加して、少からぬ功績を立てた。だから、かれこそは『赤軍の最も親しい友人』であるとして、ウオロシロフ將軍は、この戰爭談を終つてゐるのである。

スターリンの政治的生活

スターリンの政治的生活に就いては、尙書くべきものが數多くあるだらう。特に革命後の生活はすこぶる數奇に富んだものであるが、これらの事は既に幾度か書き古されたので、こゝには詳しく書くまい。そして、兎に角現在のやうな指導者的位置を占めるに至つたが、その背後には、決して仇敵が隱れてゐない譯ではない。國內は言ふまでもなく、遠い海の外にもゐる。早い話が、かれは、レーニンのやうに天成の革命家でもなければ、トロツキーのやうに雄辯家でもない。假りに名演說をしたとしても、それは議論の力ではなく、音調とゼスチユアのため

だ。それから、書物もたくさん讀むには讀むが、多くは「耳からの學問」であるといふ。おまけに余り外國の土を踏んだことがなく、自派（社會民主黨——後の共產黨）の代表者として、ロンドンとフインランドへ出かけたに過ぎない。結局、かれの强味は——力と實踐とにあるやうだ。さう言へば、スターリンが、今日事實上のソヴエート指導者になつた一つの理由として次ぎのやうな事も考へ出される。それは、彼が共產黨書記長の位置を巧みに利用し、二百萬の黨員をはじめとして、その他の政府員などを懷柔したことだ。そして、自分の意志により、或る程度までは、黨大會の代表者選擧をも左右し得る權利を有つやうになつたからである。兎に角、かういふ風な絕對權と最高の位置を與へられると、もうセンチメンタルではなくて、心臟の强い人間が必要になつて來る。事實、スターリンは、さうでなくとも意志の强固な人間で、帝制時代にもこんな事があつた。他の同志（捕縛された政治犯人）は、自分たちを護衛する軍隊の前を通る時には、兵卒の前でも頭を下げるやうにした。が、かれは、その銃の臺尻の一擊をも恐れずに、本を片手に持つたまゝで通りすぎた。かくの如く、スターリンは、常に自分の頭を低くしたことがない。この種の人間は飽くまで自分の主義政綱を信じ、双向つてくる者は

何人でも斃すし、時には、昨日の同志にさへ楯突かないとは限らない。であればこそ、スターリンはしば〳〵誰かと爭ひ、徹底的に戰ひ、同時に、いろんなデマも飛ばされるのである。

言ふまでもなく、かれの過去において、そのもつとも烈しく火花が散らされたのは、今から約十年前、トロツキーとさかんに論爭した時だ。『革命』のいはゆる理想と現實との分岐點について換言すると、スターリンは、トロツキーの『永久的な』革命說をどこまでも排擊したのである。この時には、共產黨側がトロツキーは賣國奴だといふ色刷物を撒いたので、かれに忠順な軍隊が暴動を起こしたばかりではない。その余勢は、スターリンを捕縛してモスクワ市內の某營舍に放り込んだ。そこで、ルイコフがわざ〳〵出掛けて行つて、かれの釋放を求めたが刎ねつけられる。トゞのつまりは、政府の軍隊が右の營舍を襲ひ、破壞工作までやつたので、たうとう多數の死傷者を出したと傳へられてゐる。

このニュースは、だいぶ眉唾モノらしいが、兎に角、その政治的紛爭のために、とう〳〵トロツキーは國外へ亡命してしまつた。また、ジノヴイエフとカーメネフは、自分の過誤を認めて謹愼の意を表したことは事實である。政治的紛爭と言へば、對富農策について、ルイコフ、

ブハーリン、及びトムスキーなどとも爭つてゐる。簡單にいふと、かれらのクラーク(富農)にたいするスターリンの政策が過酷すぎると言ふのだ。これには諸外國に對する宣傳方法を緩和すべしといふ他の問題も論點となつた、そして、最後には、今言つた反對派の三人が『悔悟狀』を書いて、以後スターリンに誠實を示すことを誓つたのである。

前述のやうなスターリン監禁說は、ウオロシロフ將軍が反逆して、自分の意見に從はない極東軍司令官ブリユツヘルとともに、彼を捕縛したと傳へられた時にも繰り返へされてゐる。また、かれの重態說が白色側の新聞紙上を賑はしたことは少しも珍しくない。たまに、不幸にも暗殺されたが、反共產系農民が暴れ出すのを恐れて、まだ極秘に附してゐる——などと、如何にもまことしやかにレポートされた事もある。最近には、あの赤軍將星の斷罪以後、一見して「獵奇的な」と思はせる程のニュースも捏造されてゐる。それに依ると、一赤軍將校はスターリンと會談中、俄かに匕首を振りかざしてにじり寄つた。だが、スターリンは、その護身用のピストルを持つて、同將校を射殺したので、漸く危地を免れたと。しかし、聰明な讀者は、ワルソーやリガから發せられる、この種の甚だ出鱈目な電報に、もう僞瞞されないであらう。

八將星銃殺の悲劇

こゝ二三年における政治上の出來事の中では、何んと言つても、レニングラードの共産黨支部書記長――セルゲイ・キーロフの暗殺事件を想起しなければなるまい。

ところで、こゝに問題があると言ふのは、その暗殺計畫の眞目的である。政府の發表によると、これは反ボリシエヴキー的『少數派』の陰謀で、白系露人が尻押しをしたのだとされてゐる。だが、下手人の陳述を聞くと、その反證が擧つてゐるやうだ。つまり、味方の政府員や、ゲイ・ペー・ウーの者までが、それに參加してゐたからだ。

「現在、われ〳〵は、政府、並に共産黨に席を有する者である。しかし、スターリン一派の今日の政治を極めて否定し、これがために、まづキーロフを血祭りに上げた。次いで、スターリン・カガノーヰツチ、オルジョニキーゼ、モーロトフなどをも、それ〴〵屠る積りであつた。」

若し、この陳述が『嘘』でないならば、それは共産黨にとつても、また政府にとつても、甚だ憂慮すべき事である。何故なら、その足許に、あの恐しい爆彈がこつそり埋められてゐるのも

同樣だからだ。果たして、トロツキー一派による『合同本部』事件や、『平行本部』事件が相踵ぐ。そして、この戰慄すべき陰謀事件の審理が濟むかすまない内に起つたのが――今度の八將星銃殺の大悲劇である。

スターリンの生活態度

將來、ソヴエート聯邦は、眞に、いかなる政治角度から、いかなる方向に向つて進むであらうか？無論、これは未知數であるが、その前途は決して樂觀を許しはしない。何故なら、今日すでに、あの全聯邦を震撼した國内戰時代と戰時共産主義時代を再現したと酷評する者もある位だ。

毎日、スターリンは、共産黨中央委員會の大きな椅子にドツカリと腰をすゑて、山のやうになつた自分の仕事をどん〳〵遣つてのけてゐる。タイプのカチ〳〵といふ喧しい音が絶えない。

ところで、服裝はと見ると、相變らずのダブルカラーにカーキ色の詰襟服といふ、すこぶるお粗末なものだ。そして、皮肉にも、八時間勞働ではなしに、一日に十六時間ぐらゐ働く。時と

しては、それを十八時間も續けるといふから、これこそ――『スタハノフ主義』と言へよう。

とんな忙しい仕事の間にも、スターリンは、ちよく〳〵外出を餘儀なくされる。と言つてもソヴエート大會とか、黨會議とか、赤軍の閲兵式とかを指すのではない。もつと拙らないミーチングにも、少しは顔を覗かねばならない。たとへば、トラクター實習學校の參觀などが夫れで大統領格のカリーニンや、カガノーキツチなどといつしよに出かけて行く。そして、グセニーツフ式と稱する、水陸兩用の新造車試乘式に臨んだものである。でも、かれは勿體振つたりはしないで、直ぐその車臺の上に飛び乘る。で、却つて恐縮したのは操縦士の方だつた。操縦士はいやに慇懃な態度で、しかし、簡單に

「お乘りになりますか？」

と訊いた。すると、スターリンはにつこり笑つてから答へた。

「君、いつしよに乘らうぢやないか！」

かうして、二人が運轉臺に坐ると、新裝のトラクターは氣持よく動き出し、もの一キロも走つた。そこで運轉を止めると、かれはヒラリと地上に降りて、この試乘機の構造を詳しく研

究し始めたといふのである。

かと思ふと、體育學校の合同體操が行はれた時には、スターリンが、やはりカガノーキツチや、ウオロシロフといつしよに、あのレーニン廟の演壇の上に立つてゐた。その足許には五六百どころか、數千の生徒が順序よく並んでゐた。すると、いかにも明朗な五年の一女生が代表となり階段を登つて、靜かに演壇の方に近づいて行く。でも、スターリンの姿を目にとめると急におぢけ出したものだ。

「まア、少し氣を落ちつけなさい。それから、私にゆつくり話して下さい。生徒たちが、どんなことを傳言してほしいと、お前に委任したかを」。

さう彼に優しく言はれると少女はすつかり元氣になつて

「この花束を貴方に上げて下さい、と頼まれました」

と、キツパリ言つて、それを前に差出した。だから、スターリンは、彼女の頰に輕くキツスをしたあとで、チヨコレートの小いさな美しい菓子箱を與へた。そして、元のやうに、自分の

學友たちがキチンと整列してゐるところへ歸へらせたのである。

スターリンは、かういふ極めて無邪氣な少女とのミーチングなどを終へると、また直ぐ自動車を中央委員會の表玄關へと走らせる。そして、再び自分の仕事を始めるのだが、尙且つ暇があると、次ぎのやうな藝術家との會見を行ふ。

藝術家と言つても、小說家なんかではなく、ソヴエート映畫で有名なドフジエンコの事である。嘗て、かれの作品『大地』が日本の銀幕上にあらはれ、新作『宮の町』はいはゆる極東映畫であつたために、少しく問題になつた事がある。兎に角、この新鋭の映畫人、をわざ〳〵嚴めしいお役所へ招いたのは――スターリンだつた。

無論、スターリンは政治界のことではなく、文化の問題について語つた。中でも、かういふことを熱心に話したのである。新作『シチョルス』にはなるべく民謠を多く入れてもらひたい事。その民謠は、また蓄音機のレコードにどつさり吹き込まれてゐる事など。そして、かう念のために尋ねた。「君はさういふレコードを聽いた事があるかね」。と、ドフジエンコは、「いえ、聽いた事がありません」と答へたのはいゝが、その次ぎの文句はチト心細い。

「僕の所には蓄音機がないのです」

やがて、かれは、さうした話をして、自分のアパートへ歸つて行つた。すると、暫くして誰の好意とも判らないが、そり手許に蓄音機が一臺送り届けられた。だが、實は、スターリンからの贈物つたのである。

舊ロシヤはさうでも無かつたやうだが、それが新ロシヤにかはると、個人の生活形態といふものが非常に輕んぜられて來た。これは、その國の政治精神である、コムミユニズム宣傳の當然の結果であらう。ところが、そこで一番大きな影響を受けたのは家庭生活で、夫婦の關係は今までよりもずつと自由になつた。と同時に、永い間臺所の番人だつた妻君も、現在では皆んな街頭に立つて働いてゐる。子供は托兒所に預けて。そして、食事は共同食堂ですませ、汚れものは共同洗濯所へ渡し、なほ暇があれば、一人でコンサートへも行けるといふ變り方だ。かういふ生活樣式は、とにかく新しい試みとして、一度は研究して見てもいゝだらう。だが、人の見樣では、それが下宿屋の生活のやうにバサ〳〵して味のないものに考へられるかも知れない。こゝに――時代の尖端をゆく者の歡びがあり、また惱みもある譯である。

ところが、一昨年の初夏に、この家庭生活にたいする共産主義者の實踐を裏切るやうな異變がにわかに起つた。しかも、スターリン自身が、その裏切者として登場したかのやうに見えたので、ソヴエート聯邦民を少からず吃驚させた。と言ふのは、主なる新聞の紙上で、一齊にかれが二人の子供と仲善さうに撮した寫眞が麗々しく掲げられたからだ。だから、このニュースを手に入れた白色の某新聞は、まるで鬼の首でも取つたやうに喜んで、かう野次つた。

「それは、黨のお歴々が、自ら手本になる寫眞をお撮しになつて、全聯邦民に示し給ふものである」

この寫眞は、右の反對紙が皮肉つたやうに、『赤色家庭』を整調し、我が子にたいする親權を復活するべく、わざ〳〵發表されたものか。それとも、何かの民心を慰めるための政策として企てられた事であらうか。その謎はまだ解けないが、いづれにしてもソヴエート聯邦民ばかりか、諸外國人にも、或る奇異の感を與へたことは事實である。

さう思つてゐると、次ぎには、こんな寫眞が『イズヴエスチヤ』紙に――いづれ『プラーウダ』紙にも出たことだらうが――堂々と掲げられた。それは、黒い布で頭を卷き、白いレースを肩にあてたスターリンの母が、美しい花瓶の前で撮つた寫眞である。ところが、翌日の紙上にもやはり彼女を中心として、右にはスターリンの肖像を、左には彼の愛兒(?)二人寫眞を壁にかけた部屋で、撮つたものが載つてゐる。但し、タス通信員が書いた同女史のインタービューと供に。それに依ると、スターリンの母七十五(今年七十七)で、からだが弱いために、現在は高架索の舊都チフリスで、靜かなアパート生活をしてゐるとか。

しかし、かういふスターリンの寫眞とか、その母の寫眞とかが新聞面を賑はしたのは、決して一二年前のトビツク・ニュースではない。つい、この三月の『イズヴエスチヤ』紙にもかれの『腹臣』オルジョニキーゼの寫眞が出てゐた。夏の白服を着たかれが、チフリスにある一國際劇場に勤めてゐる藝術部長の小娘を抱いて、別莊のヴエランダに佇んでゐるものであつた。もつとも、これは、かれの死んだ時に出されたやうに記憶してゐるので――例外と言へば例外だ。兎に角、さうした政界要路者の家庭的寫眞が、今日までつひぞ公衆の前に現はれなかつたのは、甚だ不思議な位である。

これは、ソヴエート政權が、專ら秘密主義を執つてゐる爲めもあらうが、事實は事實なので

ある。そのお蔭もあつて、スターリンの私的生活はなか〳〵判らないが、大體においては、政治生活と余り懸け離れてはゐないらしい。つまり、どこまでも簡素で、しかも質朴なものが多分にあるやうだ。以下、それに就いて少しく語る事としよう。

革命の直後、スターリンは、レーニンなどと一緒に、クレムリンの宮殿内に住んでゐた。その正門を入つて、左の方に折れると、そこに見える高くて白い建物が、かれの宿舎だつた。と言ふと、いかにも贅澤をしてゐるやうに聞えるが、わづかに寢室と食堂との、たつた二室を借りてゐたに過ぎない。そして、人民委員會所屬の共同食堂から運ばれる特別の食事をとつて、毎日極めて安價な生活をしてゐたのである。

當時、かれは、このアパートに舊妻とさびしく暮してゐた。だが、何故か關係を絶つて、若い一人の女性と結婚した。新夫人は、ナデイジタ・アリルエワと言つて、二人の子供を生んだ。そして、かれらを養育しながらも、工業大學へ通つて、人絹の研究をしてゐた。ところが、不幸にも、その愛妻に先立たれてしまつたので、又候、主婦を見付けなければならなかつた。恰度この頃のことであつた、オペラ專門の大劇場に、セミヨーノウナといふ美しい女優がゐて

スターリンと妙な噂を立てられたのは――。でも、嘗て日本へ來たことがあり、また極東通として聞えてゐるカラハンは、そこの女優と何度か結婚したり離婚したりしてゐる。そればかりではなく、もうヨボヨボ爺さんのカリーニンまでが、同劇場のうんと若い女優と家庭を持つたそして、いはゆる『自由結婚』のいゝサムプルを示したさうだから、別に怪しむにも當るまい。つい書き遲れたが現夫人はカガノーキツチの妹だといふ事である。

今、スターリンは露都近郊のちいさな丘の上に立つ、ある瀟洒な洋館に住んでゐる。この新しい邸宅は、青々とした白樺の林に圍まれ、モスクワ河からはさつくと涼風を送つてくる。しかし、その日々の生活は相變らず簡單なものである。と言ふのは、かれが『動中靜』を求めてゐるからだ。自分の方からは人を滅多に訪れで行かないから、自然に、お客の方もやつて來ない。素より『黨首』の事だから、名刺を差し出す者も決して少くないが、大抵は斷つてしまう。それにカルタは弄らないし、酒杯はほとんど手にしない。たゞ、大きなマドロス・パイプを咬へて、ぽか〳〵紫煙をくゆらしてゐる位が關の山。

とんな風に、スターリンの家庭生活を紹介すると、その一家はいかにも平和な雰圍氣に包ま

れてゐるやうに思へる。だが、一歩、表玄關の階段を降りあ戸外へ出ると、何者かが潜んでゐるのではないかといふ不安が無いでもない。そのために、先頃までは、始中終、十五人のゲー・ペー・ウーが警備をしてゐたと言はれてゐる。特に『キーロフ事件』が起つたり、八將星の銃殺事件が明るみに曝されてゐるから、もつと嚴重になつた事だらう。

ところが、一日も缺かさずに、この邸宅からクレムリンへ通ふスターリンなのである。だから、途中の護衛ぶりも相當なもので、道々には、約一丁おきに民兵がいかめしく突ッ立つてゐる。また、十字路といふ十字路には、やはりゲー・ペー・ウー――今はその名稱が變つてゐる――の分遣隊が控へてゐる。そして、さうした鼠一疋も見逃がすまいとする警護陣の中を、かれの素晴らしく堅牢な自動車は六十哩の超スピードを出して、ましぐらつに疾走するのださうだ。

しかし、眞に、スターリンの生命をよく保障する者は何人であらうか？　それは、決してかれに忠順な護衛兵ではない。また勞働者と農民であるとも言へない。むしろ、その政策の向背如何にあると思ふのである。

彼の戰爭に對する見解

昨年三月、スターリンは、アメリカ新聞聯盟の代表者――ロイ・ハワードと會見した。この會見において、彼は、卒直に且つ明白に、自己の意見を吐露したと傳へられてゐる。その意見といふのは、國際關係と、ソヴエート聯邦の建設事業に關するものであつた。が、それらの說明を通して、われ〳〵は、彼がもつとも大きな關心を有する政策の如何を、要約的に知ることが出來るのである。

この會見記によると、スターリンは、何よりも先きに、戰爭問題を重要視してゐるらしい。「全世界において、戰爭をよろこぶ國民はないであらう」と前提し、これが故に、平和の敵はその準備を秘密に行ひつゝあるのである。何んとなれば、かれらは、國民の監視を避けようと考へてゐるからだ、と。そして、この典型的な人物をヒットラーの中に發見して、かれが一フランス新聞記者に與へたインタビューを引き合ひに出してゐる。と言ふのは、大いに平和と人類愛を說いたやうだが、それは佛蘇兩國の平和主義への威嚇に對する「藥味」に過ぎない、と。

しかし、スターリンは、この種の戰爭の恐怖がナチ・ドイツばかりでなく、極東にもあることを指摘してゐる、同時に、ソヴエート聯邦が平和の愛好者であることは、もはや新しい證明をしなくとも、各國がよく承知であると語つてゐるのだ。

それから一轉して、かの新憲法草案に及び、これは對内的のみならず、また對外的にも大きな意義を有つものであると言つてゐる。その譯は、世界に存在する有らゆる憲法の中でも、もつともデモクラチツクなのだと見てゐるのである。

次いで、工場と土地その他を國有にし、失業者を絶滅し、社會主義的設備を行つたことなどを述べてゐる。そして、最後に、例の『共産主義的社會』の建設について論じてゐるのである。だが、スターリンが考へてゐるやうに、果して、かういふユートピアが地上に出現するであらうか。かれの說によると、現在は自己の勞働の質と數によつて賃金が支拂はれてゐる。しかし何時かは、その要求のまゝに支拂はれる時代が來るので、今言つたやうな新社會の出現は空想でないと。いづれにしても、それが可能であるか否かは遠い未來が正しく解決するであらう。

彼に課せられた宿題

今日のスターリンは、昨日のスターリンとちがつて、甚だ樂觀を許さない地位にあると言つていゝ。何んとなれば、やうやくトロツキー一派のソヴエート打倒の夢を破つたかと思ふと、八將星の叛逆的行動が遺憾なく白日の下に曝露された。そして、反スターリン政權運動は、國内のあらゆる層に浸潤してゐると傳へられるからだ。一方、ナチ・ドイツでは、この荒れ狂ふ旋風時代を利用して、自己のフアツショ政策をぐん〳〵伸ばさうとしてゐる。つまり、先づムツソリーニと握手し、英佛兩國をも懷柔する事によつて、ソヴエート聯邦を崩壞せしめようと考へてゐるからだ。

しかし、スターリンにとつて、もつとも寒心すべき仇敵は――他にある。いや、脚下に控へてゐる。それは、ソヴエート聯邦の前衛である赤軍の陣營内と、その警備隊である内務委員會（ゲ・ペ・ウを含む）内にも賣國奴的エレメントが潛んでゐる事だ。

スターリンは、これらの頑强な内敵及び外敵をよく克服するであらうか。また、かれの生命

線である共産黨の肅正工作をも敢行するであらうか。よし、それに成功するとしても、スターリンは、今日までに幾何の生命を犠牲にしたことか。これは、いかに國民の規律を重んずる爲めであつても、人道主義的觀點から決して忘却することは出來ない。尙且つ、かれの前には第三次五ケ年計畫といふ大問題も課せられてゐる。しかし、その鐵の如き意志と非凡なエナージーとはこれらの難關を突破して、近く革命二十周年を迎へるソ聯を强化するかも知れない。かくして、該聯邦は、世界の前に再び起ち上つて、その「巨大な」面貌を顯現するであらう。

（完）

375
700

昭和十二年七月三十日印刷
昭和十二年八月二日發行

定價十錢
（送料三錢）

世界の謎
スターリン

著者　尾瀨敬止
發行者　東京市麹町區有樂町二ノ二　森田益雄
印刷者　東京市芝區南佐久間町一ノ七　研文社印刷所

發行所　東京市麹町區有樂町二ノ二
全國配給所　森田書房
電話銀座(57)二五二三番
振替東京一一九一一七番

月刊『話の話』・『喫茶街』發行
雜誌『旅行雜誌』

北部配給所　新潟縣三條市田島三三四　森田書房北部支店
京阪神特約店　大阪市北區東梅田町六　大阪參文社

版權所有

〔特約〕東京鐵道局公認（鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道授產會）

各驛賣店・ホームスタンド・街頭新聞スタンド・有名賣店にあり

終